

P233[「かもめ」公演役者宛]:

P233 (左圖参照) 「ここで殊に言つておきたい事が一つあります。それは角野、平の姿形ばかりでなく、その喋り方(E)が、教養、文化(どちらも『カルチャー』:D1)を失つた(D1の至小化)日本の現代子(△枠)丸出し(Eの至小化)だといふ事です」⇒「芝居(せりふFと動きE)に丸出し(Eの至小化)は禁物です。生の役者が出てきて(Eの至小化)はいけません。(中略)生の自分以外の何者かになる(Eの至大化=D1の至大化)のが芝居といふものでせう(つまり、以下の事)。

* 場面(C')から関係(D1)として生ずる「心の動き(D1)を形のある『物』として見せる(Eの至大化)のがせりふの力学(フレイジング:E)」(『せりふと動き』)。

P234 (右圖参照) 「役者(△枠)修業の第一は自分のせりふ(F)を喋る(E)より、いやその爲にこそ、まづ相手役(場C')を初め、その場の登場人物全部(場C')のせりふに耳を傾ける[即ち、場(C')から生ずる相手の心の動き(D1)に耳を傾ける]事、そしてそれを自分なりに理解し(D1の至大化)、受け留め(D1の至大化)、心の何處かに収める(D1の至大化)事、そこから始めなければならぬといふ事です。それを見逃す(D1の至小化)演出家(△枠)を私は演出家とは認めません」。

